保育者養成課程における「こども」イメージの変容

～入学時から卒業時までの経年的変化～

A study of a change in the images of children by early childhood practitioners training course students from enrollment to gradution

上　長　　然

Moyuru　Kaminaga

問題と目的

保育者が保育を計画し，実践していく中では，保育者がもつこどもイメージや子ども観は保育の根幹をなしている。また，各幼稚園・認定こども園・保育所の各園所で設定し，編成・実施される教育課程・保育計画においても当該園所の保育者のこどもイメージや子ども観が反映されていると考えられる[1]。

保育者養成に関わるこどもイメージや子ども観に関わる研究に上長[2]による保育実習を通じたこどもイメージの変容を検討したものがある。上長[2]は，積極的に保育者を志望して実習を経験した者は実習前後を通じて一貫して子どもに対する肯定的なイメージが高い傾向にあることを示している。また，消極的な志望動機（例えば，なんとなく，など）が高い者であっても，保育実習を通して実際にこどもと交流し，こどもの様々な面を見ることで，保育実習前に比して保育実習後にはこどもに対する肯定的なイメージが高まり，否定的なイメージも積極的に志望する者と同程度になったという。こうした研究結果は，保育者養成課程の教育課程を通じて，学生が保育者としての資質や能力を伸ばしていることを示すものである。

また，児嶋・高杉・高橋[3]は保育者養成課程学生における実習に通じた保育観の変容について調査を行ったところ，入学時には「こどもはかわいい」「こどもが好き」と自分本位な志望動機をもっているが，実習を通してこどもとの関係のなかで自らの関わりを考えるようになると指摘している。また，上長[4]は保育者を積極的に志望する学生は子どもに対して肯定的なイメージを持つことをしている。また，学生が持つ子どもに対するイメージは子どもとの関わりの質を決定したり，問題解決など具体的な行動をさまざまなレベルで規定したりする重要な資質[5]である。これらのことから，積極的な志望動機を高めることは保育者としての資質や能力を高めるとともに，養成課程の学習を効果的に行うためにも重要であると考えられる。

では，積極的な志望動機はどのような要因によって規定されているのであろうか。本研究では，他者視点，自尊感情，精神的回復力を取り上げた。以下には，本研究でこれらの要因を取り上げた理由について述べる。他者視点は共感性に含まれる概念であり，他者の心理的視点を取り入れることである。藤村[6]は保育者適性の一つに「共感性」を挙げており，本研究では共感性の中から他者視点を取り上げた。また，自尊感情は人が生きるうえでの心理的な土台であることから取り上げて検討した。精神的回復力とは「困難で脅威的な状態にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても，それを乗り越え，精神的病理を示さず，よく適応している状態のこと」[7]であり，困難な状態を乗り越えていく（不適応状態を回復する）力である。保育者養成課程の教育課程では，保育者になるために乗り越えなければならない困難場面にも遭遇することがある。そのため，精神的回復力の強さは保育者にとっても重要な要因であると考えられるため，精神的回復力を取り上げた。

以上から，本研究では，保育観・教育観の根幹となるこどもイメージが2年間の保育者養成課程を通してどのように変容していくか検討することを第一の目的とする。加えて，保育者養成課程の学習を支えるものであると考えられる保育者志望動機がどのような変数によって規定されているか検討することを第二の目的とする。

方　法

調査対象：2009年に保育者養成課程に入学した短期大学生35名（女性33名，男性2名）を対象とした。そのうち回答に不備のなかった24名を分析対象とした。

調査内容：（1）精神的回復力：小塩・中谷・金子・長峰[7]の精神的回復力尺度を使用した。21項目に対して「いいえ」「どちらかといいえ」「どちらでもない」「どちらかというとはい」「はい」の5段階評定で回答を求めた。

（2）視点取得：鈴木・木野[8]の多次元共感性尺度（MES）から「視点取得」に関する5項目について「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらでもない」「少しあてはまる」「非常にあてはまる」の5段階評定で回答を求めた。

（3）保育者志望動機：長谷部[9]による保育者志望動機尺度を使用した。本尺度は保育者志望の動機について問う17項目について「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらでもない」「まあそう思う」「とてもそう思う」の5段階評定で回答を求めた。

（4）自尊感情：Rosenberg[10]のSelf-Esteem Scaleの日本語版[11]10項目を使用し，「あてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5段階評定で回答を求めた。

（5）こどもに対するイメージ：内田・古谷・兼松・中村[12]によるこどもに対するイメージ40項目を使用した。各項目について「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらでもない」「まあそう思う」「とてもそう思う」の5段階評定で回答を求めた。

調査手続き：2009 年 4 月の入学時および卒業前の 2011 年 1 月に無記名式質問紙調査による一斉調査を実施した。回答にあたっては，プライバシーは保護されること，調査以外に使用されることはないこと，回答が難しい場合は回答しなくてもよいことが紙面上で教示された。

結　果

1. 基礎統計

はじめに，尺度における項目の内的整合性を検討するためにα係数を算出した。保育者志望動機については上長[2]をもとに「積極的志望動機」「消極的志望動機」を下位尺度として用いた。精神的回復力は入学時α＝.72，卒業時α＝.85 であった。視点取得は入学時α＝.64，卒業時α＝.83，積極的志望動機は入学時α＝.81，卒業時α＝.93，消極的志望動機は入学時α＝.77，卒業時α＝.66，自尊感情は入学時α＝.80，卒業時α＝.78 であった。これらの結果より，本研究で使用した尺度は内的一貫性が確認されたため，全尺度を分析に使用した。

Table1 には，本研究で用いた変数について入学時と卒業時の平均値及び標準偏差を示した。分散分析を行ったところ，積極的志望動機と自尊感情で有意な差が認められ，保育者養成課程を通じて積極的志望動機がやや低下しているが、自尊感情は高まっていることが示された。

Table1　調査対象者における入学時と卒業時の諸変数の平均値および標準偏差

	入学時 平均値 (S.D.)	卒業時 平均値 (S.D.)	*F*値
精神的回復力	73.88 (8.64)	71.79 (11.29)	2.17
他者視点	18.21 (2.41)	18.13 (2.72)	.27
積極的志望動機	51.15 (6.36)	48.83 (9.49)	4.72 *
消極的志望動機	11.53 (3.76)	12.04 (3.88)	1.45
自尊感情	28.06 (5.94)	30.70 (5.91)	5.31 *

*: $p<.05$

2. 保育者養成課程を通じたこどもイメージの変容

本研究の対象者における保育者養成課程の 2 年間を通じたこどもイメージの変容を検討するために，保育者養成課程の入学時と卒業時おけるにこどもイメージの各項目得点について分散分析を行った（Table2）。

その結果、「敏感」「無防備」「自分本位」「よく泣く」「真似が上手」「集中している時間が短い」「年齢によってまったく違う」「遊びが生活の中心」「楽しい」「おもしろい」の得点において入学時と卒

Table2 入学時から卒業時までのこどもイメージ得点の変容

	入学時 平均値 (S.D.)	卒業時 平均値 (S.D.)	*F*値
かわいい	4.92 (.28)	4.71 (.69)	2.00
生き生きしている	4.71 (.62)	4.63 (.77)	.24
エネルギッシュ	4.83 (.48)	4.71 (.55)	1.00
可能性がある	4.46 (.72)	4.38 (.82)	.16
純粋	4.75 (.44)	4.71 (.55)	.11
素直	4.79 (.51)	4.79 (.59)	.00
正直	4.58 (.65)	4.58 (.72)	.00
敏感	3.87 (.87)	4.52 (.67)	16.28 **
無防備	3.91 (1.00)	4.39 (.58)	4.88 *
わがまま	3.67 (.92)	3.96 (.91)	2.48
自分本位	3.42 (1.06)	4.00 (.93)	7.88 **
小さい	4.22 (.74)	4.30 (.63)	.28
未熟	3.63 (1.10)	3.83 (.92)	1.72
よく泣く	3.25 (1.03)	3.83 (1.05)	9.47 **
真似が上手	3.54 (1.02)	4.17 (1.05)	8.42 **
意外な行動や考えを持つ	4.58 (.65)	4.67 (.76)	.19
興味、好奇心が旺盛	4.92 (.28)	4.79 (.41)	3.29
集中している時間が短い	3.29 (1.04)	3.96 (1.00)	11.50 **
感情がはっきりしている	4.67 (.64)	4.42 (.78)	1.87
気分が変わりやすい	3.79 (.83)	3.96 (1.00)	.52
表現が豊か	4.50 (.78)	4.63 (.77)	.35
成長・発達が著しい	4.25 (.90)	4.46 (.72)	1.00
年齢によってまったく違う	4.33 (.87)	4.79 (.41)	7.27 *
こどもなりの意志をもつ	4.38 (.82)	4.58 (.50)	2.03
遊びが大好き	4.92 (.28)	4.79 (.51)	1.00
遊びが生活の中心	4.17 (.96)	4.67 (.48)	7.67 **
理解力は大きい	3.50 (1.06)	3.88 (1.19)	3.96
想像力がある	4.33 (.70)	4.33 (.96)	.00
かわいいと思うと通じる	3.79 (.93)	4.08 (.88)	2.48
接し方がむずかしい	3.08 (1.18)	3.50 (1.35)	2.41
大人が導く必要がある	3.71 (.86)	3.92 (1.02)	1.33
まわりの影響をうけやすい	4.00 (.93)	4.13 (.80)	.35
好き	4.83 (.64)	4.67 (.92)	.52
楽しい	4.96 (.20)	4.50 (.93)	5.81 *
おもしろい	4.88 (.34)	4.54 (.83)	4.60 *
うるさい	2.71 (1.37)	2.63 (1.24)	.11
こわい	1.67 (.92)	1.83 (1.09)	.52
一緒にいると疲れる	1.63 (.77)	2.04 (1.00)	4.02
苦手	1.46 (.98)	1.58 (1.06)	.18
嫌い	1.17 (.48)	1.42 (.83)	2.09

*:$p<.05$ **:$p<.01$

業時で得点に有意な差が認められた。

入学時に比べ卒業時には、こどもに対して「敏感」「無防備」「自分本位」「よく泣く」「真似が上手」「集中している時間が短い」「年齢によってまったく違う」「遊びが生活の中心」というイメージが増し、「楽しい」「おもしろい」というイメージが低下していることが示された。

3. 卒業時の保育者志望動機に関するパス解析

分析を行うにあたり、まず各尺度間の相関係数を示した（Table3）。これをみると入学時の自尊感情や他者視点は卒業時の精神的回復力と正の相関が認められた。また、卒業時の精神的回復力は卒業時の積極的志望動機と正の相関が認められた。

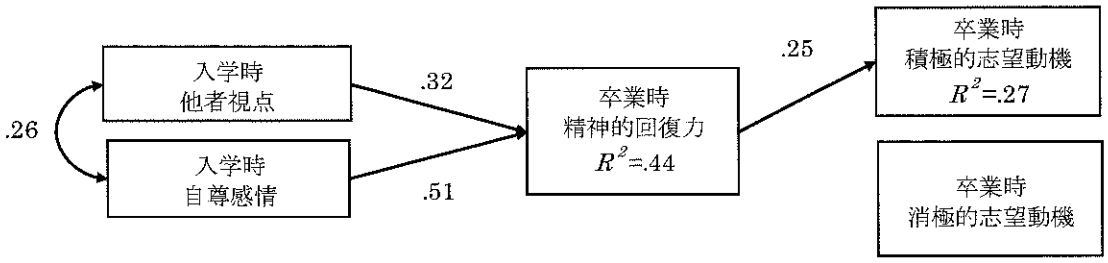
次に，入学時のどのような諸変数が卒業時の保育者志望動機を規定しているかを検討するため，Amos20.0 を用いたパス解析を行った。

Figure1 には，パス解析の結果を示した。これを見ると，入学時の他者視点と自尊感情は直接卒業時の積極的志望動機と関連せず，これらは卒業時の精神的回復力と正に関連し，精神的回復力を介して卒業時の積極的志望動機を高めることが明らかになった。また，精神的回復力は消極的志望動機とは関連していないことが示された。つまり，入学時の自尊感情の高さや他者視点を取ることができるかどうかといった個人特性が，物事に対して前向きに取り組んだりする力である精神的回復力を高め，保育者としての積極的な志望動機を高めているということである。

Table3 各尺度間の相関

	入学時 自尊感情	入学時 他者視点	卒業時 精神的回復力	卒業時 積極的志望動機
入学時自尊感情				
入学時他者視点	.14			
卒業時精神的回復力	.58 **	.54 **		
卒業時積極的志望動機	.31	.25	.53 **	
卒業時消極的志望動機	.32	-.09	.06	.21

** : $p<.01$



CFI=1.000　RMSEA=.000　AIC=24.342

Figure1　入学時の他者視点・自尊感情から卒業時の保育者志望動機に至るパス・ダイアグラム
（図中には5%水準で有意なパスのみを示した。誤差項は省略）

考 察

本研究では，はじめに，保育者養成課程の入学時と卒業時でこどもに対するイメージがどのように変容するかを検討してきた。その結果，保育者養成課程の2年間を通じていくつかのこどもイメージが変容していた。

まず，子どもに対する見方の変容である。入学時と比較して卒業時では「敏感」「真似が上手」「年齢によってまったく違う」「遊びが生活の中心」というイメージが増加していた。これは，保育者養成課程における教育課程の科目や教育課程外の活動を通じて，子どもの特徴や生活の様子にふれることによって生じた結果であると考えられる。幼児教育においては，遊びを通じた活動を中心に教育・保育が行われている。また，各年齢には発達段階なりの特徴があり，年齢にとって育ちの様子はまったく異なっている。保育者養成課程における2年間の学びを通して，こども理解が進み，保育者としての子ども観や資質・能力が豊かになっているためであると考えられる。

一方，「無防備」「自分本位」「よく泣く」といったイメージ得点は上昇し，「楽しい」「おもしろい」というイメージは低下していた。これらは，一見，否定的なイメージの変容が生じているように見える。入学直後の学生は，生活経験での子どもとの触れ合いや関わり経験から，肯定的なイメージをもっているが，そのイメージが浅い関わりや外観から得られるものであることも多い[13]。しかしながら，女子学生と幼稚園児母親を対象にこどもに対するイメージの比較を行った岡野[14]によると，女子学生はこどもを一面的に捉えがちであるが，幼稚園児の母親はこどもを「大切であり，いとおしい」が「難しい」というアンビバレントなイメージを抱いていることを示している。

こうしたこどもに対するイメージの変容を合わせて考えると，保育者養成課程の学びの中で遊びの重要性や発達特性の理解が進み，幼児教育の本質に対する理解を深めながら，子どもを一面的に見るのではなく，複眼的な視点から理解しようとする保育者としての資質が高まっているのではないかと考えられる。

また，入学時の個人特性と卒業時の保育者志望動機の関連を検討した結果，入学時の他者視点と自尊感情が卒業時の精神的回復力を高め，これが積極的志望動機を高めていた。これは，入学時の他者視点の能力や自尊感情が高い者は保育者養成課程の教育課程を通して精神的回復力を高め，保育者としての積極的な志望動機が高まることを意味している。

精神的回復力とは，「困難で脅威的な状態にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても，それを乗り越え，精神的病理を示さず，よく適応している状態のこと」[7]であり，困難な状態を乗り越えていく（不適応状態を回復する）力である。保育者養成課程の教育課程では，保育実習・教育実習などの実習もあり，心理的にストレスがかかる時期がある。他者の視点に立って物事を考えることができる力や自尊感情が高い者は，こうした心理的にストレスがかかりやすい状況にあっても，その状況を多角的に見つめることや他者の考えを吸収できるために，教育課程を通じて自分に対する

自信を深め，精神的な回復力が高まり，保育者として「子どもと関わる仕事がしたい」「自分の特性を活かしたい」と考えることができるようになるのではないかと考えられる。

こうしたことから，保育者養成課程の中では，他者の立場に立って物事を考える他者視点の力や自分に対する自信を深めるような経験をしていくことで，精神的なストレスにも耐えることができるようになり，子どもを捉える根幹となる保育者としての積極的な志望動機を育てることになるのではないかと考えられる。

引用文献

6) 藤村和久．　保育士,幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成．大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要，**9**，129-143,2010.

9) 長谷部比呂美．保育者をめざす学生の志望動機と資質能力の自己評価．淑徳短期大学研究紀要，**45**，115－130,2006.

1) 石田裕子・芝崎良典・山崎　晃．保育者の子ども観と教育課程に関する一考察．幼年教育年報，**24**，103-109,2002.

4) 上長　然．　保育者養成課程学生における保育者志望動機と「こども」イメージとの関連
－入学時の志望動機と「こども」イメージ－．近畿大学豊岡短期大学論集，**6**，41-48,2009.

2) 上長　然．　保育者養成課程学生における保育実習を通した「こども」イメージの変容．近畿大学豊岡短期大学論集，**7**，31-39,2010.

3) 児嶋雅典・高杉 展・高橋 健介．保育者養成における授業研究の試み：保育学生の保育観の変容と授業の展開．松山東雲短期大学研究論集 **33**, 37-46,2002.

3) 野村幸子・川上智香・長谷典子・藤原千惠子．子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ．人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌，**7**，169-180,2007.

4) 岡野雅子．子どもに対するイメージ：女子学生と幼稚園児母親との比較と保育教育への示唆．信州大学教育学部紀要，**110**，57-67,2003.

7) 小塩真司・中谷素之・金子一史・ 長峰伸治．ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性－精神的回復 力尺度の作成－ カウンセリング研究，**35**，57-65,2002.

10) Rosenberg,M.　*Society and the adolescent self-image.*　Prinston Univ Press,1965.

8) 鈴木有美・木野和代．　多次元共感性尺度(MES)の作成：自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて．教育心理学研究，**56**，487-497,2008.

5) 當山りえ・嘉数朝子・石橋由美．保育科短大生の「こども観」と発達期待．日本保育学会第 51 回大会研究論文集，810-811,1998.

12) 内田雅代・古谷佳由理・兼松百合子・中村美保．小児看護実習における学生のこどもに対する

イメージの変化について．千葉大学看護学部紀要，**15**，35－43,1993.

11）山本眞理子・松井豊・山成由紀子．認知された自己の諸側面の構造．教育心理学研究，**30**，64－68,1982.